

環境メッセンジャーへの道②—環境への熱き想いを感じよう！

東アジア環境映像劇場

それぞれの国で、身近な環境を守るために頑張っているたくさんの人たち。その想いを感じてみてください。

日中韓の環境問題の現場を紹介する3本のスライドショーを、BGMにのせて放映しました。また、中国と韓国からのスタッフによる中韓のスライドショーの解説と質疑応答なども通訳を交えて行いました。

熱心に視聴してくださった来場者の方と、スライドを見ながら、話し込むこともしばしばでした。

【企画の詳細】

■作品1 「沖縄県名護市辺野古 米軍海上基地建設をめぐる闘い」

上映時間：約3分／BGM：フノニ（韓国語版“もらい泣き”）／写真提供：グリーンピース・ジャパン

沖縄県には、日本にある米軍基地の実に75%が集中している。1995年に米兵による少女暴行事件が起り、米軍基地への反感が高まった。それを受けて、最も大きな基地の1つである普天間基地の返還が、96年に決定された。

しかし普天間の代替基地は必要だ。そこで白羽の矢が立ったのが、名護市辺野古沖である。辺野古沖に、海上基地を建設しようというのだ。

建設予定地には、「人魚」のモデルとなるジュゴンが生息している。沖縄周辺のジュゴンは約50頭しかおらず、水産庁のレッドデータブックでは絶滅危惧種に指定されている。ジュゴンは暖かい海を好むため、沖縄周辺のジュゴンは最北端の生息域に棲んでいることになり、生物学的にも貴重とされている。この海にはまた、サンゴウラウズガイなど辺野古沖でしか確認されない生物も生育している。

この海に建設されようとしている米軍海兵隊基地は、全長2500m、幅730mの巨大なもので、工事には約1兆円かかると言われている。海上基地ができれば、海の生き物への影響はもちろん、海とともに暮らしてきた辺野古の人びとへのダメージも計り知れない。

国内外から基地建設に反対する人が集まり、辺野古の海岸では2004年4月19日から毎日、抗議の座り込みが続けられている。また、環境アセスメントも実施せずに強行されたボーリング調査を阻止するため、地元のダイバーたちが船を繰り出して海にやぐらを組み立て、交代で調査を監視している。地元のおじい・おばあも祈りを捧げる毎日だ。

反対の声が大きくなれば、政府も工事を強行できない。反対運動を繰り広げる人びとは、少しでも沖縄の現状を知って欲しいと、国会前でも座り込みを展開している。その輪は、次第に海外へと広がりつつある。



©Greenpeace

■作品2 「韓国扶安郡 核廃棄物処理場建設をめぐる闘い」

上映時間：約3分／BGM：ハイヌミカゼ／写真提供：チャムソリ（韓国）

韓国全羅北道扶安（ブアン）郡は、ソウルから車で走ること約3時間の位置にある。この田舎町は、韓国の環境保護運動の大きな争点となった問題に直面し、一躍有名になった。

2003年7月、ブアン郡の沖合に浮かぶ島（蝸島 ウイド）に核廃棄物の処理場を建設するという計画が突如明らかになった。扶安郡のキム・ゾンギョ郡長が、同島への処理場誘致を表明したのだ。処理場を建設することになる自治体には、政府から高額の補助金が出る。財政難に陥っていたブアン郡の首長にとっては良好な話に思えたが、扶安郡に暮らす約7万人の市民にとっては寝耳に水の話であった。これをきっかけに、地元住民をはじめ、環境運動家など多

くの人びとが一斉に反対運動に動き出すこととなった。

扶安郡庁前には連日、朝から晩まで老若男女を問わず多くの市民がつめかけ、反対運動をアピールする揃いの黄色いTシャツを着てデモを行った。商店街の店先にはシンボルの黄色の旗が掲揚され、街をあげて反対運動を展開した。デモ中に警官隊と衝突し血を流す男性、剃髪して抗議する女性、泣き叫んで反対を訴えるお年寄りなどもおり、現在の日本の運動とは隔絶した、まさに“闘い”が繰り広げられた。

10ヶ月間の拘留から出所したばかりという30代の男性は、反対デモの最中に警官隊ともみ合いとなり「公務執行妨害」で逮捕されたが、拘留されていた10ヶ月間を、「扶安の将来や自分の人生を見つめなおすいい機会だった」と、前歯のない笑顔（警官隊との衝突で失った）で振り返った。

文字通りの「死闘」を繰り広げた結果、2004年12月1日、政府は扶安郡への核廃棄物処理場建設計画を中止することを発表した。ブアン郡は歓喜に沸き、町中で喜びを共有しあった。

だが全エネルギーの14%を原子力でまかなう韓国には、まだ核廃棄物が存在する。どこかには処理場を作らねばならない。現在、いくつかの団体が処理場の誘致を検討しているが、いずれも地元住民の強い反対にあって、建設地決定は難航している。ブアンも「自分の土地でないから良い」のではなく、1人ひとりが国全体のエネルギー政策を考えなければならない段階に来ている。



©チャムソリ

■作品3 「可可西里—チベットレイヨウを守ろう」

上映時間：7分43秒／映像提供：緑色北京（中国）

青蔵高原特有の野生動物、チベットレイヨウは、標高4000メートル以上の所に生息する国の一級保護動物である。毎年夏になると妊娠した雌のレイヨウは集団で可可西里の奥へと移動し、一緒に子どもを産む。そして、産まれた子どもをつれて普段の生息地に戻る。

ところが、1950年代に青蔵道路が建設されたことで、青蔵高原が分断され、高原の東側に生息しているチベットレイヨウは、出産のために毎年二回も青蔵道路を渡らなければならなくなった。21世紀に入って、新たに青蔵鉄道が建設され、チベットの急速な経済発展によって青蔵道路の交通量はますます増えてきた。この止まることを知らない車の流れと青蔵鉄道が、チベットレイヨウの移動を妨げている。青蔵鉄道のレール下にトンネルを作っても、利用するチベットレイヨウは少ない。2002年には約700頭が道路や鉄道を渡れずに繁殖地に行くことが出来なくなった。その数は2003年に1500頭となり、青蔵鉄道東側のチベットレイヨウは、生息習慣に相当な影響を受けて絶滅の危機に陥った。

環境NGO「緑色江河」は、2001年から全国から30名の専門知識を持ったボランティアを、長江上流と可可西里地区に建設した自然保護区「索南達杰」に派遣した。彼らは、保護区施設のメンテナンスや、青蔵線100キロの野生動物の種類の数を確認した。しかし、2004年、青蔵鉄道のレールがチベットレイヨウの通過区域に到達し、現在では、150メートルの大橋の橋穴が、チベットレイヨウの唯一通行できる区域となった。



映像を解説する周玲さん（緑色北京）

そこで、チベットレイヨウが一日も早く新たな環境に慣れるために、ボランティアによってチベットレイヨウ移動保護計画を立案。チベットレイヨウを監視し、道路を渡ろうとするとき、道路の両側に赤信号を出し、横断幕で通過する車を止め、運転手への協力を求める。こうした活動を通じて、青蔵線を走る運転手にチベットレイヨウの習慣や保護の理解を求めた。こうした努力によって、2004年6月下旬の数日間で、2000頭のチベットレイヨウを繁殖地に渡すことができた。しかし、すべてのチベットレイヨウを渡すことができたわけではない。チベットレイヨウの移動を保護する活動は今後も続く。